

稲作情報 9 号

気温高く、多照・少雨、生育は 4～5 日早く、幼穂形成期～減数分裂期である。!

1 気象経過

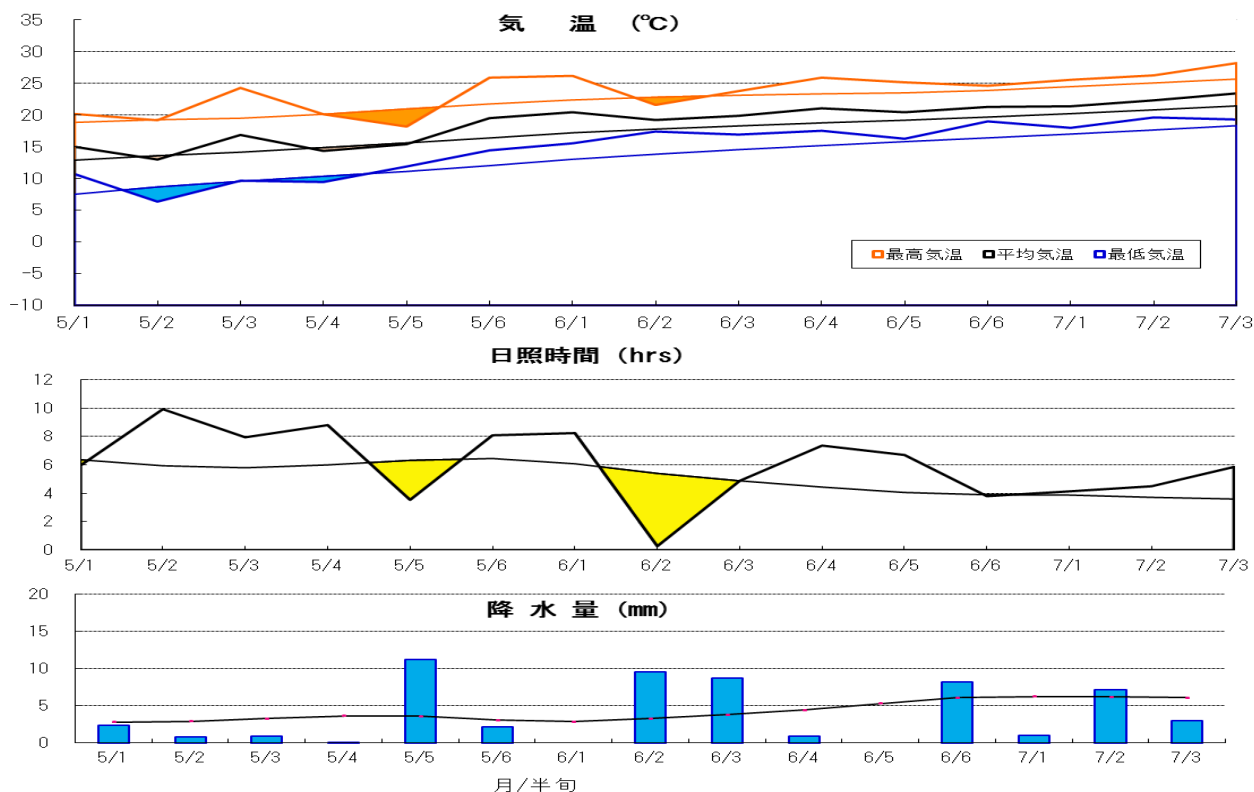


図-1 平成 26 年産水稻田植後の気象経過 (アメダス古川 半旬別)

- ・ 6 月中旬以降、最高・最低・平均気温とも高く、6 月の平均気温は平年より 2.1℃高かった。
- ・ 6 月第 3 半旬以降、多照に経過した。7 月は、中旬までの日照時間は平年比 123%であった。
- ・ 6 月の降水量は、平年比 166%であったが、7 月中旬までは 67%と少雨となっている。

2 今後の気象予報

(1) 週間天気予報 (7 月 16 日～7 月 22 日)

- ・ 気圧の谷や前線の影響で曇りの日が多く、期間のはじめは雨が降る所もありますが、期間の終わりは晴れる日もあるでしょう。
- ・ 最高・最低気温ともに平年並か平年より高い見込みです。

(2) 1 か月の天候予報 (7 月 12 日～8 月 11 日)

- ・ 平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
- ・ 平均気温は、高い確率が 50%です。
- ・ 降水量は、平年並または多い確率ともに 40%です。
- ・ 日照時間は、平年並または少ない確率ともに 40%です。
- ・ 週別の気温は、1 週目は、高い確率 80%です。2 週目は、平年並または低い確率ともに 40%です。
- ・ エルニーニョ現象の発生は、当初の予想よりも遅く、夏の後半から発生する見込みです。

[次回 1 か月予報公表 : 7 月 17 日]

3 生育状況

- ・水稲の生育は平年に比べて4～5日早く、幼穂形成始期（県全体の平均）は7月6日頃であった。
- ・出穂期（県全体の平均）は8月1日頃になる見込みである。
- ・7月中旬の生育ステージは、多くの水田で幼穂形成始期(1mm)～減数分裂期(3～12cm)となっている。
- ・7月10日現在の生育については、草丈が63.3cm(平年比101%)、1㎡当たりの茎数が582本(平年比108%)、葉数が11.1枚(平年差+0.4枚)であった。
- ・葉色は、7月10日現在、37.9で前年よりやや薄く、ここ数日の高温で更に葉色は低下している。

a. 県全体

県全体	草 丈			茎 数			葉 数			葉緑素計(GM)値			幼穂長 (mm)
	本 年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本 年 (本/㎡)	前年比 (%)	平年比 (%)	本 年 (枚)	前年差 (枚)	平年差 (枚)	本 年	前年差	平年差	
	63.3	101	104	582	108	105	11.1	0.1	0.4	37.9	1.0	▲ 0.0	

b. 品種別

品種別	草 丈			茎 数			葉 数			葉緑素計(GM)値			幼穂長 (mm)
	本 年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本 年 (本/㎡)	前年比 (%)	平年比 (%)	本 年 (枚)	前年差 (枚)	平年差 (枚)	本 年	前年差	平年差	
	ひとめぼれ	62.9	101	103	567	106	106	11.1	0.1	0.4	37.9	0.9	
ササニシキ	62.0	104	105	635	113	108	11.3	0.5	0.4	36.9	1.0	▲ 0.9	1.7
まなむすめ	68.3	98	100	562	107	102	11.3	0.0	0.6	40.0	1.5	1.2	2.6

※平年比：前5ヶ年（平成21年～25年）の平均値との比較

※葉緑素計(GM)値：葉に含まれている葉緑素(クロロフィル)量の測定値で、栄養状態を把握するもの。

表－1 県内の水稲生育状況（宮城県7月10日調査）

【土壌栄養】（古川農試定点圃場での傾向）

- ・施肥窒素の消失時期は、最も早かった25年に次いで早くなっている。
- ・堆肥を連用施用した高温傾向を反映し、水田で窒素の発現は多めである。しかし、有機物の少ない水田では、窒素の発現が少ないと思われる。
- ・稲が吸収している㎡当たりの窒素量は植物体のポリウムが多く、平年より多くなっている。



図－2 乾田直播栽培3ha（名取市耕谷）



移植栽培の幼穂発育例（減数分裂期）

4 今後の管理

(1) 水管理

- ◆気温が高めに経過する予報がでており、白未熟粒の発生などによる高温障害が懸念されることから、穂の周辺温度を出来るだけ下げる管理が必要である。
- ◆そのため、水の駆け引きが唯一の手段であり、冷たい水のかけ流しが有効であるが、潤沢に水管理が出来ない地域では、日中の暑い時期に深水にし、夜は気温が低下したら落水する。
- ◇稲の一生で低温に最も弱い時期である「減数分裂期」（花粉の出来る時期）に達していることから、今後、低温（平均気温20℃以下または最低気温17℃以下が目安）が予測される地域や遅れている圃場では、幼穂を保護するための深水管理を実施する。

◇深水管理は、幼穂の位置付近まで水で保護することであり、その深さは初期に10cm、中後期は17cm以上が必要と言われている。7月後半に減数分裂期に達する圃場では、気象予報からすると低温が懸念されるので十分注意が必要である。

(2) 追肥

- ・葉色が低下している圃場が多いと思われ、幼穂形成期や減数分裂期に倒伏診断指標を参考にしながら、適期に追肥を実施する。
- ・近年の葉色を見ると幼穂形成期を過ぎたあたりから急激に葉色が落ちており、目標とする期待葉色値から外れており、それが原因で白未熟粒や充実不足による品質低下が見られるので、窒素不足にならないように、注意する必要がある。

(3) いもち病

- ・葉いもちに感染しやすい好適気象条件が全県で見られるので、気温が25℃付近になってきたら、発病が懸念されるので、水田をこまめに観察する。
- ・特に、上位葉（止葉～下位数枚）に葉いもちの発生が確認された場合には、穂いもちへの感染源となるので適切な防除を行う。

(1) カメムシ防除（斑点米カメシの注意報1号発令）

- ・水田周辺のカメシ類の密度を低くするため、牧草の刈取りや雑草地の草刈りは、出穂の10日前までに刈り終える。（出穂が早まることが予想されるので、刈り遅れよう注意）
- ・水田内にイハカメシやヒエノ多い圃場ではカメシの発生が多くなるので、防除を検討する。

[下図の写真は防除所HP等より引用]



図-4 本田の葉いもち発生例と穂いもち



アスジカスミカメ(体長 4.6～6mm) ホリハリカメシ(8.5～11mm) アカヒゲホリミドリカメ (5～6.5mm) ムギカスミカメ(6～9mm)

図-5 斑点米カメシの主要種